

ポトマック通信

2019年(令和元年)夏季号

編集者・発行人

ワイルス蓉子(Yoko Wiles),
Silver Spring, Maryland, USA

在米韓国人団体によって
取り上げ続けられる
慰安婦問題

73年前までの日本と韓国（当時は朝鮮）では、娼館が公然と認められており、貧家に生まれた女子は、家族を助けるために、女銜と呼ばれる仲買人によって、娼館に売られていったのである。 日本が戦争に敗

けたおかげ（？）で、マッカーサー元帥をトップにいただく連合軍総司令部により、日本の社会改革が行われた。ことに連合軍総司令部は、日本女性に男性と同じ社会的地位・権利を与えることを、真っ先に取り上げた。 女性にも20才になると参政権が与えられた。男性にだけ門戸を開いていた全ての国立大学や早稲田・慶應等の私立大学も、女性に門戸を開くようになった。女性に門戸を閉ざしていた青山学院大学（当時は青山学院専門部）を、私も受検することができた。 合格者発表の日に、合格者の番号が張り出され、自分の受験番号を見つけたときの嬉しかったこと！ 不謹慎ながら、”戦争に敗けてよかったです“と思ったことだった。

現在、韓国政府を始め、韓国の反日団体が「慰安婦問題」を取り上げ、アメリカ中に「20世紀最大の最も悲惨な人身売買問題」と触れ回って、各地に慰安婦の銅像を建てる運動を続けている。 73年前までの、日韓両国の女性の社会的地位が男性よりもかに低く、そして女性の性を売る商売が公然と認められていた社会の生き証人としては、アメリカ中に「慰安婦の像」を建てろと言ひ回っている一部の韓国人、ことに戦後何10年も経つから親に連れられてアメリカに移住してきた韓国人の若い世代の人々の、厚顔無恥には呆れるばかりである。

この問題を日本で取り組んでいる「なでしこアクション」によれば、中華系団体の慰安婦正義連盟（CWJC）が中心となり、2017年9月にサンフランシスコの広場に慰安婦像を建て、「第2次世界大戦中に日本軍によって強制連行されて兵士を性の相

手にさせられ殺された少女たちの名誉を讃える」と、全く真実と異なったことを掲げている。そして、その後も慰安婦問題関連の動きは、CWJCによって全米に広がっているとのことである。以下はその運動の詳細である。

** 慰安婦教育 高校の先生用の手引書を作成・配布

サンフランシスコに慰安婦像を建てた慰安婦正義連盟（CWJC）とグレンデールに慰安婦像を建てた韓国系加州フォーラム（KAF C）が慰安婦について教育するため、高校の先生用の手引書を作成。

** サンフランシスコから南に約 24 km にあるミルブレー市議会では、3月 12 日の市議会で、"Proclamation to Remember and Honor the "Comfort Women and victims" (慰安婦被害者を記憶し、"名誉"を讃える宣言を採択した。

(筆者注：元慰安婦と申し立てるお婆さんたちに如何なる名誉があるのか、名誉と言う言葉の意味をはき違えている市議会の常識を問いたい思いがする。)

** 「ユネスコ世界の記憶」登録運動

慰安婦正義連盟（CWJC）と、韓国系米国人加州フォーラム（KAF C）が中心となって「慰安婦は性奴隸」と主張する「慰安婦の声」の“ユネスコ世界の記憶”への登録に向けた運動を開始。署名を集め動画を配信中。

** 慰安婦を学ぼう。夏のインターン・シップ・プログラム

慰安婦正義連盟（CWJC）が慰安婦について学ぶプログラムを発表。高校生や大学生などの若者を対象に慰安婦について学ばせ、参加者には 150 ドルを支給するとのことである。

私はここまで書いて、在米韓国人団体の“歴史的無知と恥知らず”には、全く開いた口がふさがらない思いがしている。彼ら達が、慰安婦問題を自分たちの都合の良いように曲げて語っていることに、私のように 70 年前までの日朝の社会を知る者は呆れるばかりである。74 年前までの日本と朝鮮には、公娼制度が認められ、貧家に生まれた女子は女衒によって売られていったのである。「貧乏人の子沢山」という言葉通り、74 年前までの日朝の貧困層には子供が多かった。そして、家族に病人が出たり、働き手が怪我をしたりすると、女の子が家族の犠牲になって、女衒によって娼館に売られていったのである。また、当時の朝鮮には「スルポチフ」「カルポチフ」と呼ばれる飲み屋があって、そこでは飲み物を提供するだけでなく、酌婦を性の相手にすることもできた。この様な当時の社会的実情を全く知らないか、知っていても頬張りをしているのか、ともかくアメリカ中に、「慰安婦の名誉を讃えるために、銅像を建てる」と言い回っているのには、無知と言えか恥知らずと言うか、呆気にとられる思いである。公娼制度が認められていた 73 年前までの社会状況を知ってか知らずか、「慰安婦の名誉」とはまさに“よく言うよ”と開いた口がふさがらない。

ちなみに、「カルポチフ」と「スルポチフ」については、何年か前に在日韓国人の 8

0代の男性から、「当時の朝鮮では『スルポチフ』『カルポチフ』と呼ばれる飲み屋がある、そこで働く酌婦たちが性のサービスをしていたことは周知の事実であった。どうして、日本人はこのことを言わないのか」という投書が、日本の新聞に掲載された。勿論、この男性のように、韓国人の中にも、過去を直視し、理性的に物事を考えている方も多いことが分かり、将来の日韓関係を正常化するにあたって心強いことと思った。

しかし3月10日、カルフォルニア州ミルブレー市当局は、慰安婦に対する声明文を彼女たちの写真と共に発表した。この声明文を読めば、慰安婦問題が70年後に如何に曲げて語られているか、その時代に生きた者にはよく分かるであろう。そして掲げられた慰安婦の写真は、在米韓国人が主張するように10代の少女たちにはとても見えない。以下は写真と共に掲げられた声明文である。

「ミルブレーは
第2次世界大戦当時に
性奴隸にされた女性たちを追悼し
敬意を表する

3月12日、ミルブレー市議会は“慰安婦正義連合”と“Jin Duck and Kyung Sik Kim基金”と提携して、第2次世界大戦当時、婉曲的に「慰安婦」と呼ばれた被害者を追憶し彼らの名誉を讃えることを発表した。
(下線は筆者が加筆)

午後7時に市議会場で開かれたこの厳肅な行事は、40年以上も隠されていた第2次世界大戦当時に、韓国女性が強制的に性奴隸として日本軍に拉致されたという暗

い歴史的事件を明るみに出した。そして、生存者がどのような仕打ちを受けたかが明らかにされた。

約半世紀も、第2次世界大戦中に性奴隸にされた女性たちの名誉は隠されていた。これらの勇敢な女性たちは立ち上がり、彼女たちの体験を語り、当時性奴隸にされた全ての女性たちに彼女たちの体験を語らせる勇気を与えた。ミルブレー市長のウェイン・リィ氏は「これらの女性や少女たちを追憶すると同時に、我々は性を売り物にする全ての行為に対して、断固として戦うことを誓おう」と述べている。(中略)

元慰安婦の一人は、『我々が最も恐れていることは、第2次世界大戦中の我々の苦痛に満ちた体験が忘れ去られることである。慰安婦の声は黙らされたり忘れられたりしてはならない』と述べている。そして、「慰安婦正義連合」の理事の一人、リリアン・シン元検事は「元慰安婦に対する認識を広め、名誉を讃えることに協力するミルブレー市議会に対して感謝する」という声明文を発表した。(下線は編集者が加えた。)

この際、私ははっきり言わせてもらえば、これらの一冊の在米韓国女性たちの厚顔無恥には、全く呆れるよりほかはないということである。私は1930年生まれで、日本統治下の朝鮮半島を2回も往復している。私は、いわば歴史の生き証人である。私の世代の人たちよりも、前の世代の人たちは全てあの世に移ってしまった。それを良いことに、70年前までの日朝の歴史を曲げて伝え、政権が代わるたびに慰安婦の問題を持ち出して賠償金を要求し、しかもこの問題を国連の人権問題委員会にまで持ち出すのは、これが文明国家のする

ことかと言いたい。20年間も私の美容師だったリィ夫人も、このリタイアメント・コミュニティで知り合った韓国人のご夫妻たちも、全て良い人柄で楽しくお付き合いしている。厳しい言葉で言わせてもらえば、これらの韓国人のお友達の故国が、70年前以上の社会問題を政権が代わるたびに持ち出して、事実を脚色して賠償金を取り続けるようなことをするとは思はなかった。

在米韓国女性の団体は、「日本軍に強制連行され、アジア各地で慰安婦にされた10代の女性たち」と言うけれど、彼女らが掲げる写真を見れば分かる通り10代の少女ではなくて、お姉さんと小母さんたちである。ちょっと顔が見えている男性も、日本の兵士ではなくて、当時の男性が強制的に着ることを強制させられたいわゆる「国防服」である。彼がかぶっている帽子も、当時の日本の男性が強制的にかぶらされた「戦闘帽」と称するもので、兵士たちが戦地でかぶっていた「戦闘帽」とは似ているが少し違っている。この写真を見れば、彼が「女銜」であることに間違いない。もう当時の生き証人がほとんど鬼籍に移ったころに、当時の事情を曲げて伝え、写真まで持ち出してくるのは“卑怯”としか言いようがない。いくら何でも「慰安婦の“名誉”的ため」という言い方は全くの的外れで、厳しい言葉で言えば「恥知らず」と言わざるを得ない。

”しかし”とここで強調したいのは、戦後73年たっても、「世界が考えている慰安婦問題とは、日本政府によって強制連行されて日本軍の性奴隸にされた女性たちだ」思い込み言い回っている人たちがいることである。彼らの思いこみを変えさせるのは容易ではない。

6月7日の“サンケイ・ニュース”によれば、出崎幹根（通称“ミッキー”と称する日系アメリカ人）という大学院生が、慰安婦問題の真実を探るべくあらゆる人々にインタビューを行い、「主戦場（Shusenjo: The Main battleground of Japan's History War）」というドキュメンタリー映画を製作したとのことである。これまでにインタビューに応じた人達は、国や思想、信条にかかわらず、大学教授やジャーナリスト、活動家と幅広く、これまでの「慰安婦問題」を扱ったドキュメンタリー映画と一線を画する作品とミッキー氏は以下のように主張している。

「日本人が本来持っている他者を想う気持ちによって、日本と韓国が互いに抱く差別感情を取り除く可能性を強く感じている。『慰安婦問題』をあらゆる思想や心情を持った人々が額を寄せ合って見つめることができれば、互いに理解しあえる日が来るはずだ。その機会を生み出すきっかけとして、ドキュメンタリー映画を製作している。」

日本で「慰安婦問題」を正そうと取り組んでいるのが「なでしこアクション」という団体である。この団体の代表者山本優美子氏は、この映画を御覧になって、以下のように述べていらっしゃる。

「その内容が出崎氏が『学術研究、尊敬と公平さを持って紹介する倫理的義務、公正性且中立性』と述べていらっしゃる内容からかけ離れていることに非常に驚いています。」

この映画は冒頭で慰安婦問題の強制連行と性奴隸説を否定する保守系の人たちを画面一杯に大きな文字で、「右翼」、「ナショナリスト」「歴史修正主義者」「歴史否定

主義者」とレッテルを張って、話を進めていきます。そして最後には、慰安婦問題からかけ離れて日本の保守による陰謀説と脱線し、日本の再軍備化の問題にすり替わっています。」

山本氏がおっしゃるように、現在慰安婦問題を取り上げる人のほとんどが、初めから「慰安婦は強制連行だった」という偏見を持ち、それに絶対に固執していることがある。私は彼らこそ歴史の修正主義者であると思う。ミッキー氏も、そういう歴史修正主義者の良い例であろう。そして彼が最も学者としての倫理に欠けていることは、「倫理的義務、公正且中立性」と言いながら、全く事実から離れた話を掲げて「性奴隸」説を真実としていることである。73年前の日朝の歴史、ことに社会史を深く勉強したならば、当時の女性の社会的地位が如何に低かったか、ことに貧困層に生まれた女性は家族の犠牲になるのが当たり前という風潮があったことが如何に多くの「女性哀史」を生んだかということを学ぶであろう。こういうかつての女性哀史を知らずして、「慰安婦問題」は語れない。ことに、進歩的思想を持つ女性の中にも、慰安婦を強制連行されたと信じている人がいるのには、彼女たちは如何なる歴史を勉強してきたのかと落胆せざるを得ない。

戦後72年、当時の社会的背景を知っている人たちの多くは鬼籍に移った。しかし、私のように1930年「昭和5年」生まれは、まだいくらか生き残っているのである。72年前に日本が戦争に敗けて、マッカーサー元帥の率いる連合軍の占領下におかれた10年間に、日本の社会制度は根

本的に改革されたのである。その一つが女性の社会的地位を男性と平等にすることであった。女性に参政権を認める、全ての大学を女性にも門戸を開く即ち教育制度の改革、そして公娼制度の廃止であった。公娼制度が廃止される前の日本の社会では、貧困層に生まれた女性は、小学校の義務教育を終えると、年季奉公の女中や女工に出された。中には娼家に売られて、お姉さんたちの世話をしながら17才になるまで、将来どういう仕事につかされるかを見習わされた。このような女性の人権が認められていなかった社会では、多くの“女性哀史”があったことは想像に難くない。日本は、ことに日本女性いとつて、戦争に敗けたことは決して悪いことではなかったと、今にしてしみじみと思っている。72年前までの日本(そして朝鮮)の女性の社会的地位の低さを知らなければ、慰安婦問題は語れないと言うのが私の持論である。強制連行しなくとも、貧困層に生まれた女性は女衒によって売られていったのである。この貧困層生まれた女性の“女性哀史”に全く無知な人たちが、国連の人権問題委員会にまで提訴しているのは、歴史的無知の“恥知らず”と呆れるばかりである。

東北の貧しい小作農から生まれた「つやさん」の実話である。私が生まれたとき(1930年)、私の母は子守りを探していた。近所の酒屋で、「気が利かない」と主人に殴られて井戸端で泣いている女の子を、母が見るに見かねて、「今度生まれた子どもの子守りを探しているのですが、そんなに気の利かない子で気に入らないなら、家に譲ってくれませんか。子守りくらいはできるでしょう」と言って、我が家に引き取られ

たのが“つや”さんだった。 彼女は東北の小作農の家に生まれ、小学校を卒業するとすぐ口減らしのために子守りの年季奉公に出されたのであった。 つやさんは無口で器量もあまりよくない田舎娘であったが、母に一生懸命教わって、朝ご飯の支度はもとより、料理もできるようになった。 勿論、赤ん坊の世話も良くしてくれて、私が物心ついたころには、つやさんは我が家になくてはならぬ存在になった。 父が満州(現在の中国東北部)に転勤になったときも、一緒に来てくれた。 そして、10年余りも勤めて、彼女が我が家の大切な一員になったとき、彼女の父親が訪ねてきた。 そして、「田舎も軍需景気で、この頃の若者は軍需工場で働いていい給料を取るようになります。 つやに良い配偶者が見つかることで、まことに勝手な言い分ではあるが、彼女を家に戻してもらえませんか」と言った。 母は「つやにも良い縁があれば、それに越したことはないでしょう。 急いで後任を探して、つやに仕込んでもらうようにしますから、2~3ヶ月待ってください」と言った。 そして、香さんという近在の農家の18才の娘が、近所の八百屋の世話で来ることになった。 香さんはとてもつやさんのようにはいかなかつたが、若い娘たちが工場に働きにいってよい給料を取るようになった時代に、女中に来てくれる娘は貴重であった。 母は香さんを大切に扱って、料理を教えてやり、近所の裁縫塾にも通わせていた。

つやさんは12年も働いて我が家ではなくてはならない存在だった。 母は「つやがいなくなるのは本当に残念だが、故郷に帰ってよい縁があれば、彼女にとっては

それが一番幸せだ」と言って、嫁入り支度の助けにと相当の退職金を渡した。 そして12年間に盆暮れにもらった着物や和装の小物を二つの大きなトランクぎっしり詰めて、つやさんは故郷に帰っていった。 その後数年たって、東京に移り住んだ私の家に、つやさんは可愛い坊やを連れて訪ねてきた。 夫は軍需工場の工員だったが軍隊に召集されて、千葉の連隊勤務とのことだった。 つやさんはその後、子供を連れて故郷に戻り、父親の畠仕事を手伝いながら、夫が除隊するのを待つとのことで、別れの挨拶にきた。 故郷に帰ったつやさんから何の便りもなかった。「つやは小学校もろくにいかなかつたので、字を書けないのに気が付かなかつた。 縫物や料理と一緒に、字を書くことを教えてやればよかつた」と、母は残念がっていた。 戦後、父が戦死した我が家では、経済的にも精神的にも社会の荒波と闘わなければならなかつたので、いつとなく“つやさん”とは縁が切れてしまった。 彼女が孫に囲まれて幸せな老後を過ごしていることを祈っている。

今から考えると、当時の貧困層に生まれた女性は本当に可哀そうだったと思う。 今でも、つやさんが娼館や料理やの下働きに売られずに、女中奉公で家事や手仕事や行儀・作法を身につけて、嫁に行けたのは幸せだったと思う。 そして、かつて日本ばかりでなく、アジア各国の女性の地位が低かったことを思う時、本当に良い時代になつたとつくづく感慨無量である。 そして、韓国がいつまでも慰安婦を日本に対する鬱憤ばらしに使っていることを、本当に卑怯だと思う。

4月27日のサンケイ・ニュース（ネットで配信されているニュースレター）によれば、21日から始まる週に行われた国際観艦式に日本の護衛艦と韓国の軍艦が参加したことが、韓国で大きく報道されたとのことである。そして、日本の護衛艦が「旭日旗」を掲げていたことを、韓国の新聞が「戦犯旗」を掲げていると非難の記事を掲載したことである。韓国では近年、「旭日旗」を「戦犯旗」と言って反発している。文在寅（ムン・ジェイン）政権は自国の観艦式に招いた日本の軍艦に対して、旭日旗を掲げることを認めないとという国際常識に反することまで述べているが、旭日旗を「戦犯旗」と非難しているのは、韓国だけである。それでは、トナム戦争中に米軍を応援するためにベトナムに送られた韓国兵が行った村落の焼き討ちや婦女子に対する強姦は、戦争犯罪にはならないのかと問いたくなる。

戦争中、日本の統治下にあった韓国でも多くの青年が日本の軍隊に徴用された。太平洋戦争中に、日本軍が占領したオランダの植民地であったジャワ島を日本軍が占領したときオランダ兵の捕虜収容所が設けられた。ここに当時、朝鮮から召集された多くの兵士が働いていた。そして、彼らの中には、同僚の日本兵が見かねて止めるくらい捕虜になったオランダ兵を虐待する者がいたとのことである。戦後、オランダ軍による戦争犯罪者の裁判で、これらの朝鮮人兵士はオランダ人の捕虜たちの証言によって死刑に処せられたとのことである。当然のことではあるが、韓国ではこれらの死刑に処せられた韓国兵士は日本軍に利用された犠牲者としている。このような7

0年前のことを、今更持ち出したくないが、「旭日旗」を「戦犯旗」と非難して、何もかも全て日本が悪いという言うのは、非常に不遜だと思う。

私は昭和10年と16年の2回、朝鮮半島を縦断している。前にも述べたが、昭和10年の合併直後の朝鮮半島は、如何にも貧しかった。関釜連絡船で釜山の港に着いて、鉄道の駅まで10数分間くらい歩く間、両側に屋台のような店が数軒並んでいて、強いニンニクの香りが漂っていた。京城を過ぎると、はげ山が続き、寒々とした農村風景であった。7年後の昭和17年に釜山港に着いたときは、南満州鉄道の駅まで10数分間歩く駅の両側には、レストランやお土産物を売る店が並んで、日本内地の大都市の駅のように賑わっていた。プーサン（釜山）から首都ソウル（京城）まで、鉄道の沿線には青々とした稻田が続き、京城（ソウル）と平城（ビョンヤン）の街はビルが並び近代都市に変貌していた。私は決して朝鮮半島を日本の植民地にしたことを見認するものではないが、日本統治下の朝鮮半島は全ての点で近代化されたことは認めなければならない事実であると思う。日本の統治以前の朝鮮には、小学校も100校くらいしかなかった。日本の統治下で、小学校は全て義務教育になり、中学や大学まで設立されて教育が振興され、港湾は整備され、農業や工業が振興されたことは、当時朝鮮を訪れた外国人も認めていたところである。日本の統治時代に、半島の近代化ことに教育の普及と鉄道と港湾の整備や農業や工業の振興に勤めたことは、韓国人は公平に認めなければならない事実だと思う。そして、それと同時に何の根拠もない

優越感を持って、朝鮮人を卑しめた日本人がいたことを、我々も謙虚に認めなければならないと思う。しかし、韓国人の中には、70年前の出来事にいつまでもこだわり、ことに戦後生まれの若い世代に、日本に擱取されたと事実を曲げて、国内だけでなくアメリカでも言い回っているのは、本当に遺憾としか言いようがない。

私の孫の二人は、長女夫婦が韓国と日本の孤児院から養子にもらった子供である。女の子は3才まで、ソウルの孤児院で育てられた。ソウル・オリンピック前まで、韓国は孤児を積極的にアメリカに養子に送り出していた。当時韓国が孤児を国際養子に送り出すときは、非常に良心的で、養子に選ばれた子供は、心身共に健全な子供か監視する機関で1ヶ月過させ、それにパスした子供を送り出していたのである。チソニは3才の時に長女夫婦の養女にむかえられた。現在、結婚して3人の男の子の母親になり、幸せに暮らしている。毎年送ってくるクリスマス・カードには3人の男の子と寫した写真が貼られて、写真の中のチソニは、幸せそうな母親の顔である。

長女夫婦はさらに3才の男の子を大阪の孤児院から養子に迎えた。この男の子は、在日韓国女性が産院に産みに来て、出産1週間後にこの子を置き去りにして出て行ってしまった。この子の母親は一緒に来た友達と韓国語で話していたし、自分は韓国人で子供の時に親に連れられて日本に来たと述べていたとのことである。韓国大使館に届け出て韓国籍に登録し、大阪の孤児院に預けられた。院長は、この子は国際養子に出した方が、日本で育てられるより幸

せではないかと、国際養子機関に登録したのである。彼は、知能テストや身体検査の結果、養子に出すのに差し支えないとのことで、国際養子候補者のリストに登録されたのである。夫も私もこの二人を他の孫と同様に分け隔てなく可愛がってきた。この孫の一人、チソニから「おばあちゃん、日本人は韓国人をいじめたんだってね。学校で韓国人の友達が言っていたよ」と言われたときは、涙がでるくらい本当に残念であった。学校で韓国人の友達に、「日本人は韓国人をいじめたのよ。日本人なんか信用できないわ」と、日本人の養母を持つ彼女をさも軽蔑したように言われたとのことだった。この孫が、母親のジュネーブ転勤で、スイスのジュネーブのインターナショナル・スクールに通っていたとき、同じ学校の韓国大使館や商社の子供たちから徹底的に差別されたとのことである。彼らたちは「孤児院育ちで、アメリカ人にもらわれた子供と」と卑しんで、孫を仲間に入れようとはしなかったとのことである。彼女は夏休みにアメリカに戻ってきたとき、私の顔を見るなり「おばあちゃん、私は韓国人じゃないのよ。アメリカ人なのよ。韓国人は大嫌い」と言った。私は孫を可哀そうに思うと同時に、彼女を仲間に入れてくれなかつた韓国人の学友たちの心の狭さと意地悪さを本当に口惜しく思った。

そして、6月3日のウェブサイトで、韓国で製作された慰安婦問題を取り上げた映画「主戦場」に関する記事を読んだ。戦後72年、しかも慰安婦は強制連行ではなかったことが、当時の生き証人（私もその一人であるが）がいるにもかかわらず、「慰安婦」は日本政府によって強制連行されたと思い

込んでいる人たちがいることを知って本当に残念に思っている。この問題の根底にあるのは、当時日本と日本の統治下の朝鮮でも公娼制度が認められており、貧困層に生まれた女子は、家族を助けるために娼間に売られていったという社会的事実があり、この問題は、そういう当時の社会的背景を知らずしては語れない。しかし現在でも、韓国政府は「慰安婦は強制連行だった」と、国際的な場で主張しているのである。

この記事によれば、4月公開の慰安婦問題を扱ったドキュメンタリー映画「主戦場」に登場する藤岡信勝拓殖大学客員教授らが「出演は承諾していない」として、上映差し止めを訴え出たとのことである。しかし、この映画の製作で監督の出崎幹根（でざき・みきね）氏は、都内で記者会見し、「彼らが上映を差し止める権利はない」と述べ、彼らの要求に応じない考え方を示したことである。出崎監督は映画の中で藤岡氏らを「歴史修正主義者」と位置付けている。そして、「彼らは世界的に合意されている歴史観を変えようとしている歴史修正主義者だ」と述べている。そして「世界が考えている慰安婦問題とは、彼女たちは性奴隸であり、20万人もいた強制連行された女性たちだということだ」と主張している。彼は慰安婦は強制連行でなかったと主張する人々を「世界的に合意されている歴史観を変えようとしている」と述べている。しかし、当時の生き証人の私から言わせれば、彼こそ73年前までの日本の社会事情に全く無知で、世界的に合意されている誤った歴史観を正そうとしない恥ずべき日本人の一人だと思う。

ミッキーの愛称で親しまれている出崎監督は、日系アメリカ人である。彼はフロリダ州出身で、元医学部予科生・元修行僧で、現在日本の大学に通う日系アメリカ人である。彼は、「人を助けて幸せにしたい」という思いから、医者になるためにアメリカの大学の医学部予科コースに入学した。そして、大学で催されていた瞑想のワークショップにふと参加した。彼は瞑想を日課として続けているうちに、今までに経験したことない心の平穏を感じるようになった。そして、「瞑想を極めたい」という思いから、タイで僧侶になるための修行を最終目的に、医学部予科コース卒業後の2007年に来日した。そして英語教師として、山梨県や沖縄県で5年ほど働いた後、タイに行き僧侶になるための修行をした。しかし、就業中に父親が亡くなつたのでアメリカに戻つた。アメリカで1年半働いた後、日本と韓国が互いに抱く差別感情の解決の糸口を見つけるべく、2015年に来日して、大学院に入学した。そして、卒業プロジェクトに「慰安婦問題」を取り上げたのである。そして、正しい歴史を次世代につなぐネットワーク“なでしこアクション”という非営利団体を立ち上げた山本優美子氏も、彼の趣旨に賛同しインタビューを受けていらっしゃる。彼は山本氏に以下のようなメールを送っている。

「私は日系アメリカ人で、現在上智大学だ大学院生をしております。慰安婦問題をリサーチするにつれ、欧米のリベラルなメディアで読む情報よりも、問題は複雑であることが分かりました。慰安婦の強制に関する証拠が欠落していることや、慰安婦の状況が一部の活動家や専門家が主張す

るほど悪くなかったことを知りました。私は欧米メディアの情報を信じていたと認めざるを得ませんが、現在は疑問を抱いています。 大学院生として、私は、インタビューさせていただく方々を、尊敬と公平さを持って紹介する倫理的義務があります。

これは学術研究であるため、一定の学術的基準と許容点を満たさなければならず、偏ったジャーナリズム的なものになることはありません。 卒業プロジェクトとして大学に提出する予定です。」

山本氏も他の出演者たちも、この映画は公正で学術的に偏向していない大学院生の卒業プロジェクトと思って協力した。しかし、出来上がった映画は、慰安婦を強制連行された性奴隸とし、これを否定する山本氏や保守系の人たちに対して、画面一杯の大きな文字で「右翼」「ナショナリスト」「歴史修正主義者」「人種差別主義者」「歴史否定主義者」というレッテルを掲げているのである。 この映画の最後に山崎氏は以下のように述べている。

「最後に、日本の皆さん。 米国人として、再軍備が正しいかどうか、口出しするつもりはない。 しかし、日本にとっての再軍備は、米国が始めた戦争で戦うことを意味する。 だから、自らに問うてほしい。 本当に私の国の戦争で戦いたいのかと。」

山本氏は、この映画に対して以下のように述べていらっしゃる。

「私も他の保守系の出演者も、公正で中立で学術的に偏向していないはずの上智大学院生の卒業プロジェクトに協力しました。 この映画はそうした私たちの好意を裏切るものです。 学生が大学の名前を利用して、

このような道義に反することをすべきではありません。 出崎氏らは上智大学の信用を落とす行為をしたことを自覚しているのでしょうか。」

ミッキー氏はこの映画を製作するにあたって、このように述べている。「日本人のもっている他者を想う気持ちによって、日本と韓国が互いに抱く差別感情を取り除く可能性を感じている。『慰安婦問題』をあらゆる思想や信条を持った人々が顔を寄せ合って見つめることができれば、互いに理解しあえる日が来るはずだ。 その機会を生み出すきっかけとしてドキュメンタリー映画を製作している。」

私はミッキー氏のこの言葉を読みながら、彼は70年前までの日朝の社会と女性の社会的地位について、全く理解していないことが分かった。 73年前に、東京の街が焼け野原になったことは、現在東京の街に住むほとんどの人が想像もつかないであろう。 私が百数十年前の江戸の街について何も知らないように。 そして、ミッキー氏は、70年前までの日朝の歴史、ことに女性の置かれた社会的地位について、全く無知なままに「慰安婦問題」の映画を製作されたのであろう。 その勇気には脱帽のほかはないが、当時の社会の生き証人がまだいくらか残っていることに気づかなかつたのは、手抜かりだったと残念に思う。

私は日本の多くの都市に赤線地帯と呼ばれる売春宿が並ぶ地域があって、売春が公然と行われていたのを見てきた世代である。 72年前まで、日朝とともに貧困層に生まれた女性のなかには、家族の犠牲になっ

て売春宿に売られていった女性がいたのである。貧困層の女性を売春宿に世話をする”女衒“という商売がまかり通っていたのである。私は今までにもびたび書いているが、当時は電柱に堂々と「カフェー女給募集」とか「娼妓募集」という広告が貼られてあったのである。母に、「娼妓ってなに？」と聞いて、「子供はそんなことを知らないともいいのよ」と言わされたことを覚えている。それだけに、私は出崎氏のような学者こそ非常に卑怯な「歴史修正主義者」であると思う。彼に山本氏を非難する資格はないし、厳しい言葉で言えば、「学者」として物事を正しく分析する資質に欠けているとしか思えない。当時の日朝の社会の事情——貧富の差が大きかったことや、貧困層に生まれた女性は家族の犠牲になるのが当然という風潮——を知らずして当時の世相は語れない。

私のような浅学の者が、大学教授を批判するのは非常に僭越で、多くの人から非難されるかもしれない。しかし、73年前までの日本の社会を全く理解していない歴史学者によって、当時の社会事情が語られているのに対して、私のような昭和初期生まれで、戦争を身をもって体験した者は、反対の声を挙げずにはいられない。70年前に日本の敗北によって戦争がやっと終ったときに、如何に多くの軍国主義礼賛者が、あっという間に平和主義者に変わったことか。